韃靼勝敗記

四

184

へ13
4047
4

韃靼勝敗記巻之四

○李氏護を授けて山西勢を悩ます

然る所李自成の義づるを智謀と勇ある八賊の首なり李伯玉は兼て英吉利の軍艦を防がんとて黄河口に留りしが今は淮南の総督王可彰と共に李氏が陣に加り猪軍を遠し寧ろ李伯玉もその意に任せ城中に入て暫く人馬の労れを休めける柳天龍も李伯玉が指揮を受て二万の軍勢にて生捕る英宗を呵責して南京に到ると聞く近隣の諸軍は風聞聞るれど是とも見んとて老少男女の差別なく左の両側に

日本イスラム協會圖書之印
早稲田大學圖書
分類 D63
番号 12
通番 345
45 6380
184

群集して凡物を既みして南京に到り勝ちに乗じて此旨を訴へければ浩武飛りう天徳帝のおまへに出て此度黄河口の戦ひに英将を始め一方の勢を生捕英将降を乞ふに依て今日南府へ引来れば其勢を広庭に引居君是を御覧倫言ありて罪を赦させ給はゞ二心なく属し奉らんと奏し則一万餘の英卒どもを広庭に引出させ天徳帝上段に立て詔りして英国は旧交の好をもつて一旦小京に一味し合戦に及ぶといへども我に敵するにあらねば我何ぞ英国を悪まん汝等宗軍利なくして降を以て赤心を顕し降参を乞ふ条神妙なり自今野心を挿まず是に属し忠

を尽せ四海一統して後は厚く恩賞せんと飽まで叮嚀の一言に慶賈徳を始め士卒皆く感涙を流して斯る明君と知らば猥りに敵対し悔しさより後は我々に二心なく仕へ奉るのミならば和国女帝へも此趣をもつて君に属せんことを申勧めんと謝しければ浩武飛りう帝の待遇厚く汝等小京へ加勢して我を出さの旨を本国へ申送りしに依て不日に大軍押寄るの由を李伯玉より急々へ申越さる趣是あつて余義なき事なれども未だ勝敗を決せざれば汝等は南府に留まるべし此旨心得よとて南京府の内和の兵に浩る諸侯へ五百人づゝ分ち預けらる又李伯

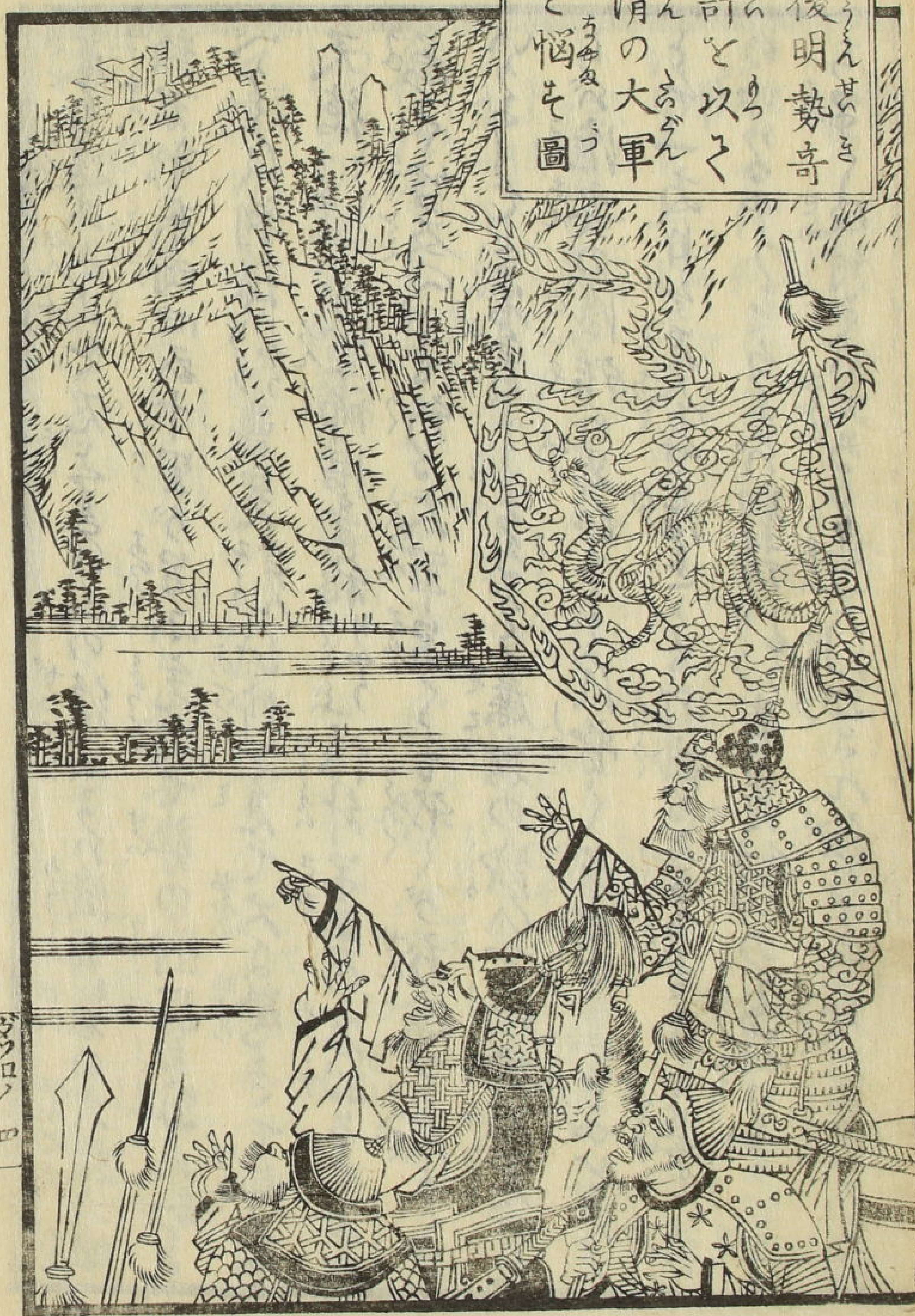
門 へ13
號 4047
巻 4

玉麒麟ハ淮安城に留りしより日々王可彰と共に
軍議を論じ海上よりハ先ヅ慶賈濠が言し英吉
利後詰の大軍押来らバ容易の事にあらず又北京よりも
英吉利と謀じ合せしならバ何れ大軍を以陸よりも
押寄んも計りがたしとて先に乗取る所の軍艦大小六十餘
艘を淮安城の外堀の入江に繋ぎ又城の内外要害の
全からざる所を修補し敵を待方に壱人の者を出して軍
備厳重なり是又遠からぬ山西汾州の大守劉璋
同澤州の大守曹寛の両将ハ北京より淮安後詰の
催促あるゆゑ俄に軍勢を調練し両将合て十万餘騎

にて攻寄んとす玉麒麟が間者より告しらバ驚て語
しけるハ今此事ハ卿等も色なき事ども海上ハ英吉利大
軍なるべし先ヅ陸より十万餘騎の大敵押寄らバ前後の
合戦ハ難義なるべし宜しく謀を設け陸地の敵を欺
き数日を移さしめ海上の敵ハ我自ら討べしとて王可彰
に令して近隣の土民を集めさせ昼夜時日を移さず
三万人を得たり是を六手に分け一隊各五千人翟瑛
陳連等の勇将六人に士卒五千人づゝを授けて之を
率ゐしめ旗幟を造り五千人に旗幟二本づゝを持せ
翟瑛陳連等の六将を隊長として白桃原山を東西

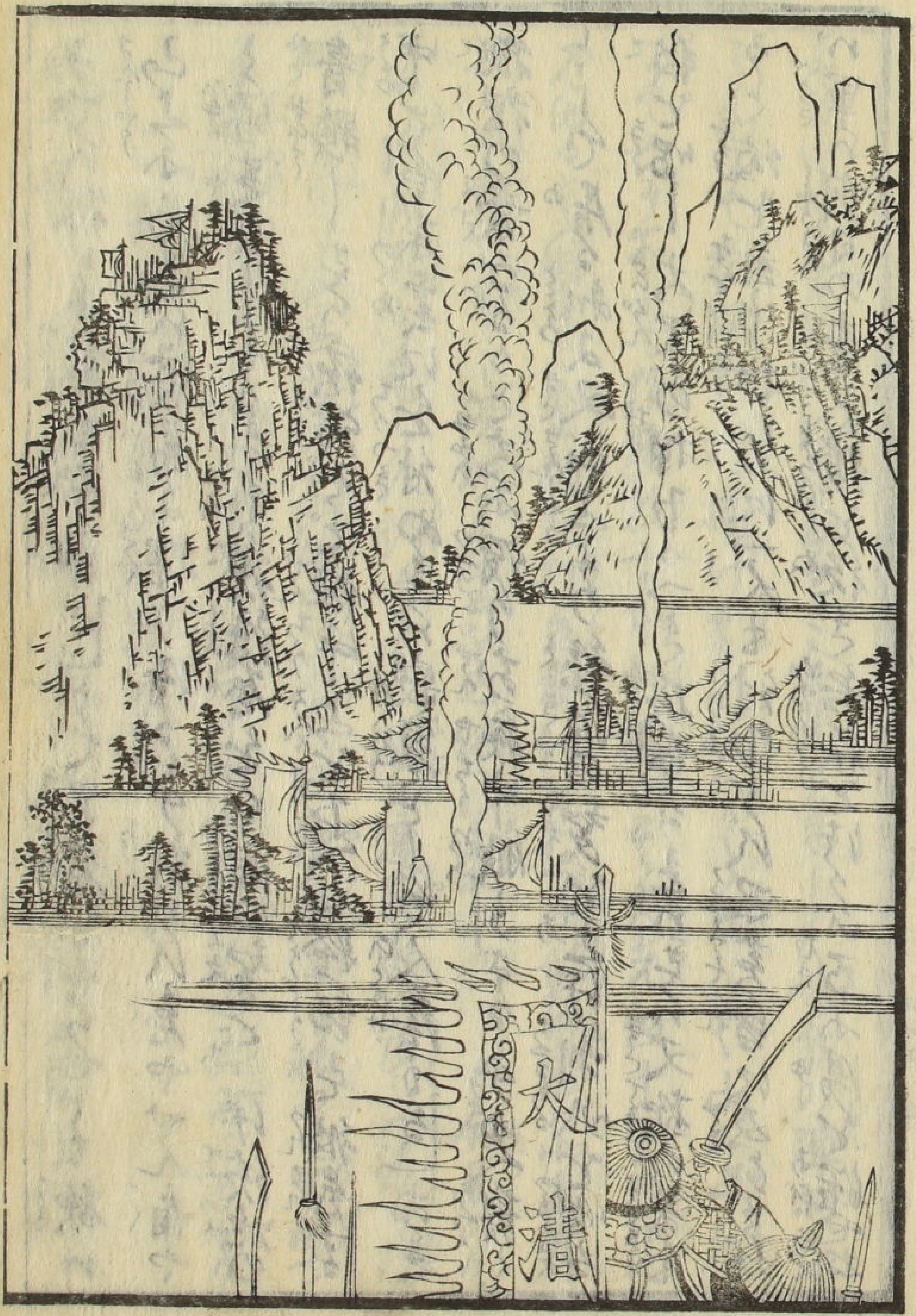
不長く聳りおくに淮屋の大尽を開けれハ敵勢此山を眺
むしてれ何方よりも此地へ来るの縁のに依く山の絶頂
に登り六ツ所に陣し古氏ある下知して各々旗幟を靡
し緑波の声を上て今も打かゝるべき勢ひを做し夜ハ数万
の松明を燃し金鼓を打鳴し敵陣をさく空鉄炮を放し
夜討なんどの容子を見せかけバ兵の合戦をなすべうらん
済度の敵を打拂ひ是を自ら勝利なくべしと細ろ小計策
を授けしかバ翟璜李い陳連か木の六ね桃系山へと雑さ
り日おくバして桃系山より指図のごとく六ヶ所に分ま
陣を正行度を出して頻りに敵を定軍山を拝し

来り遥に山上を見上まバ山の絶頂より浅明製の大旗大幟
数万本東西凡五十里が間に充満て勢の劉璋敵兵升れ初る
べうしに劉璋曹寛此体を見て大に驚きて曰 未
天徳しゅてんが軍師諸葛孔明が陣の名ねあるらんハ
気く皆及べども彼る大軍多くも我くが前途を塞るを
いかにして防戦しきろがたく廉家の勢ひを仕掛不えされ
らバ淮安の後援の思ひもよらバ皆く兵を止め容子を見よ
とて一両日を見合せ居まとも打掛るまなく兵く勢
の加る中うそろまバ劉璋曹寛の両将いまを詩
ち早く攻討おバ大なる患を引出さん後りとて敵の虚実を伺



後明勢奇計を以て清の大軍を悩す圖

ダツ品ノ四



されば賊りに軍も些しも屈せずとて勇者をつかはせども敵は
山上にありて容易に攀り得る能はず兎やせん角や
と評定なしける所に其夜夜半頃に陣屋を目がけ鉄砲の
音轟し忽ち落付ぞど陣中上を下へと騒動を彼是する
中早や東雲に至り付めまゝ寂寞として人影もなし去れ
ば狐狸の業なるかと大に心得ず夜中眠らざりければ欝く
として居る所に又山上より鐘波の聲をあげ喇叭を吹き
鼓を鳴し大軍の押下るべき様子なるゆへ又敵の寄来
ると銃を並べ把ゆるに一人も討取らん子若に及びされ
ば軍は明日の事と糧を従ぎ兵粮をつかひ或は湯を浴せ拵

まる中子刻の刻限に至ると合図と覚しく味方の陣所を
目がけて狼煙一ツ打揚げ雲に挟かると覚しく山の中程
まで六ケ所とも狼煙数十本打揚る其光数十里の外に
見ゆるまで附まで金鼓を打ち鳴し討をなすべき形勢なれば小家族
又甲冑を帯し鉄砲の玉を込め支へを並べ待ども合図のみ
にて往夜寄る来らず動かずして連日連夜敵は度々の様なり
略く其度寄する毎に其体のみ疲れ果て又日夜痛ると雖も軍勢
も追々抜くに斃る始め十万と唱へしも今は僅五千余とぞなる

○英吉利勢再び敗軍の事

咸豊三年八月定海に於て英吉利の提督慶賈達

が往来ありし英船本国より到り北京よりの勅使定海の来
りしく加勢をさしむるによつて直ちに虎門厦門定
海三ヶ所の兵を集め軍艦六十余艘に分て黄河口に押
寄南京に攻入らんと既に出帆せし跡を異国の将へ
女帝詔して彼国の一千八百五十一年九月廿旬に水師提督
薛覇厄に軍艦大小二百五十艘に軍勢十万余騎を
従へ北京加勢南京征討を命せらる薛覇厄謹で然
受し是を惣督して出帆し既に廣東の北方遠の沖に到べ
小船をもつて虎門厦門に来る事の体を知らせるに慶貴法
ともに手はん難く二万五千の軍勢にて黄河口に押寄一戦

のかは南京へ生捕られ生死を未だしらずと言へしかバ
薛覇厄是を歯がみをなし慶貴法をいかりて味方の
続かざる先に事を計り紛る不覚を取る事こそ奇怪なれ
然りとて今更悔んで詮なされバ我が惣勢黄河口に押寄せ
二度三たび敵を破り南京を攻んで先敗の恥辱をすゝがん
二百五十艘の軍艦を十隊にわかち一隊二十五艘づゝ続へ
正しく黄河口へ漕来り先陣すゝむ 黄河口の岸ちかく乗
寄せ幾度も雷の天砲台を打掛る此時黄河口の総督王可彰
率ひ来れハ李伯承りきく向ひ来て天徳帝に降参しき
りしかり未だ寸功も建ざるなし此度の先陣を

らバ我航海の術をもて敵を破らんと忽これが李伯玉く
暫く思惟して我軍将皆勇壮なれども航海の術に疎しと
憂慮し王可彰が家よりよく熟せし先陣を拝し味方の内
より航海に馴たる者を八千人撰み出し王可彰にこれを授け
これバ王可彰ハ手勢と合して二万余騎已が将へし軍
艦とり此度乗たる所の英船に打乗南蛮流西洋流打
混じて先へ大筒を放し掛て漕寄せ李伯王りく八隊に立て
英河にも急の湊己五ヶ所に陣を布き登陽なる大筒を仕掛
後陣の旗を風に靡かせて威容備くより既に王可彰ハ
船を乗めて洪炮を打掛まども英吉利新製の軍艦へ水

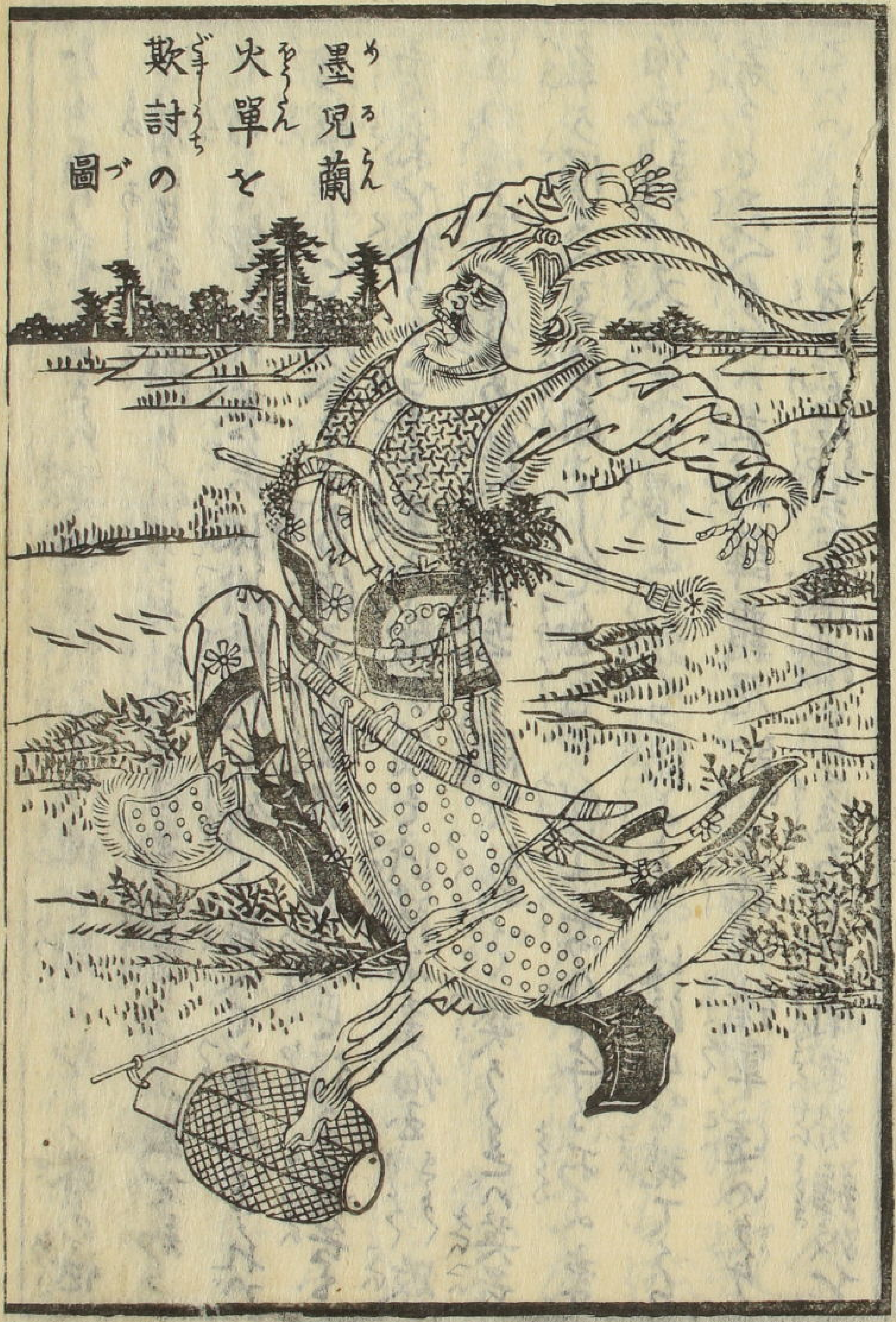
燃と唱ふる種の煙硝実弥していかなる大熕と云ども打砕く
こと能ハず適大熕の玉の中る時ハ水に浮みて早く走なり王
可彰ハ予て船ハ水抜と唱ふる種の造り船にして火術の命
英人ハ遥に劣りし敵の為に三艘を打砕れまとめき立て
乃ハ流石の王可彰も思案して敵も軍艦要実なるうへに
航海火術に熟したれバ詮のごとく炮戦の時を移さバ味方の
船悉く打砕るべし又力戦に及べ彼が十万ハ我二万なり
敵十分也と御気ハ敵船に大筒を放し切る事ならバ見
て敵の艦に乗移り行端より切殺をと下知して軍艦
数艘と一連にし大ぬの艦を目がけく並付べ敵船斤面ある

大熕三十八門を一度に打放せし王可彰が船二艘まで
ちまれ打くだかれ臣ども悉く砂じるゝが船が出しも撓
まずして王可彰烈しく下知して敵船へ今大熕を放し切
かり出し習ふ者も押寄て先のまゝと矢よりも早く漕ぎ付に
英船数多をして急に船を曲輪と返し片面に並べ立し大
熕三十八門を差向又一同に打放せを其まゝにする屋上の系
と扱ふがごとくなりしは王可彰が敵船に乗移らんと私ひけれ
剰さへ此頃ひは味方船人なる若干と見ゆ往方なくして今に
何の面目ありて李伯玉がりぞ不面を合さんよしや敵は討ずとも
潔よく討死せんはなく疾く来まさりなく大熕を放し掛く玉

薬の撓く丈いと概に鉄ふせて敵の軍艦数十艘まで王可
彰が付添さ遣し軍艦を数乗色八方より天砲を打掛
て既に危ふく見へける所へ李伯玉がりぞく多く是を添つて
多船をひきて王可彰に云せるへ軍の勝敗は時の
運に有りと血気の鉄砲を放して士卒を失ふのこ存らん
あらん命を全ふしてとく引退きたまふべしと申しけれ
ども王可彰是を見て僅に小艦と纏め陸地をさして
逃行の味方を者まで残め二万の軍卒僅に二千ばかりに討
なされし面目なくぞ見へける英勢是に気を得て二百余
十艘の軍艦黄河の七十八里が間に充満て陸地を

く大熕天炮を烈しく打掛大山も崩る勢ひにて押結
まバ雷伯玉五ヶ所の陣へ下知を傳へ陣ハ恒形の
べし竜蟠の大筒ハ遙なるゆゑ打掛に敵上陸するに及で
恒形の尾を以て引包ミ旋さんと討れきと思召をる黄河口
中央の陣にありて左右に心を配り王所乾ハ我後陣ハ
あらしめ炮銃の秘術を尽して隙なかりしに雷伯玉
壱人にて左右五ヶ所へ下知しけるゆゑさしもの軍配行届かね
して既ニ二ヶ所も敵の為に打さくめられ陣を捨て逃亡
る是を見るに浪よりあがる英吉利勢信くまを得く先陣
後陣打混じ諸一同に浪の居ハ押寄て先陣より追くず

上陸し英ね薛霸厄も既に上陸し烈しく下知し級
付鉄炮を打振て攻掛る味方ハ僅に五万に足らざれバ敵ハ十
万に余る大軍なりけれバ味方是に気を呑まれ恐怖して既に
将ぞ既に総敗軍に及ばんとせし時雷伯玉此体を見て天を
拝し秘文を誦しければ不思議なるかな南京の方より一村
の黒雲飛来り其中より怪しの異形の物あらはれ身の丈
一丈余ありて眼ハ鏡のごとく照輝き口ハ耳元まで裂て毛
髪逆立口より炎を吐き左右の手にハ大きなる銀鎗を打振
あるひハ身の丈四尺計にして色ハ青漆のごとく頭より
両角ありて惣身より炎燃出るあり或ハ鬼女の優しく



墨兒蘭火單を欺討の圖

なるありけるさハ英芸の頭上より鉞を振てかの脊の彼
る者ハ足元を潜り斬る兵形のその書を一方より数を知ら
ぞ打かく鉞まさハ英芸銃術鉄炮を斜に構へて突んとすれバ
忽然として消へまく其後左右に形を現し頭を放に英芸も
勇氣を挫かまき果く戦ひ得ぞ此隙に李伯玉りくきよく敗
軍の残兵を集め備へを立直し陣を整へく突かくまへ英芸
軍の備へさ満面さして血走り纏に乗んとする所に李
伯玉りくきよく又秘文を唱まへバ忽ち満上より逆浪山を捲てうち
寄るくれバ英芸薛覇厄せきいと始め諸軍遠いらけ
こいいる身も涼みて此後より南宋勢鐘波を

縋り兵形と共に臣掛る薛覇厄せきい今ハ詮方なく降人に
出たり李伯玉りくきよくこまを見て急を止め提督を始め将士
の分捕く武芸を賞上乗ひ秘文を唱ふまへバ兵形を往
ほとなく消失逆浪忽ち収まりに於まれバ英勢ハすべ
作天し取ハ歎ねに奇術ありて斯る怪兵を現し就くが
大軍を挫ぎしこと悟く兇怖し水師提督薛覇厄せえハ
逐洞をれ李伯玉りくきよくに従ふる旗ハ先立て慶賀德ろくが
徐へに従く女帝ハ我か命じて小島に加勢せしハ逐島の
好みありて止事を得ざまへバあり縁ち後明帝に敬對する
の謂きはし彰かくハ天徳帝てんとく哀憐を垂て罪を俘され

あへ奸臣に阿り女帝を勧め小京を離れ永く天徳帝と
なれに属しまんとなされバ李伯玉りくて是を以て忠義
を願ひたまへども我一己の才略をもて恐れ雖し南京に奏
して裁許は纔かにして先丈とて我は怖るるならば悉く
大元帝の兵を出し浪爲に陣して天皇を待べし若海に猶
不顧てハ我妙術をもて忠ちに鏖にせん能く慎とへいさらう
狼藉あるべからずと見威し且宣めて除しされバ英将薛
覇厄せて信く恐怖し能ら背くるなく浪邑不除しさく
許容を得李伯玉も軍勢を出して二百五十艘の軍
艦も一所は築の砦を分けて我を対垂を射ハ淮安の浦

中にあつく此都南京へ来るをまちて侍べしむ

○忠孝両全復讐の事

爰に雲南國帝代の復讐ありて混錦を取るに喀爾喀ある
に合体せし法王唆喇剌嘛ざらの座下に火草とん墨児薬
めるといふ二人の勇士あり彼國の風俗として上に長槍を用
練するをもつて勇名とせる此時唆喇剌嘛ざらのまへに諸民
と称す火草とん墨児蘭めるの両人もお揃ひに中華に
騒乱ある地得り退入ての武勇を評じる中に墨児薬
めるらん元来勇氣人に勝れ手猛惣暴慢なるが己が勇を
に誇りて座中の人ひとつ更なり天が下に人なきさま言

罵りて侵しられば火草なうんは沈勇猶は性質篤実にし
て而も博学なるまでは是を学び難く席をみちゆくる者は学殿
如何さるまでども熟古今を考ふるは世に学ぶる者の勇士たて
皆文武の両道を兼備して勇とのミ悪む八匹夫より匹夫の
勇八一人の敵するのミ何ぞ褒するに足らんと座中を顧りミ
諸りられば墨児葉らん是を学びてんやの大に懐ま其元来
学才なるまでは議論するのう能くば兵口をしれ行き無念
や暁ざりしん皆しあへて火草なうん向ひ先度の洞ヶ峠の
旧史に泥ミ画学をもつて武勇闘戦を論じは笑しく中
さらく共によれたく識らざれば私を始め座人猶よれ仕豬し

待しば先度と我と長様をまなく立向ひ勝劣を試んと居
丈なるは取て法錐より火草なうん共しも蹉せずそ並へて云
如く先度我言を嫉り試合を望まるれども同僚の争闘
無益なり是則ち匹夫の勇なりぞやと言へ懲しられば
墨児蘭らん聞て拐も憤り有無の返答もなく既に級を執て立
掛らんとする時座中に居合人々周章騒ぎ抱き留君お
まて斯る争論不穏なり静りあへと極しに言葉を尽し
て宥むまでは墨児葉らん詮方なくして止りぬ嗟呼嘲嘲らば
ら席上より退に是を見て元来武勇遑しき法主なるまでは
能く歎き猶も若殿原のしぬのみかも成らんと思ふ恵し支

人を呼どつけ遠町る掴ゑを悍らぞして争論をするの無
礼なり差ゆるし屁されあらねども作の争論と違ひ武辺
を嗜むより起るのなれバ双方抜合せ捻をもつて武藝を
試るよ勝負終て後ふ遺角の裁許あるべしとありければ双
方得しく用意して廣庭の東西ふ引ゆきれバ噠嘧喇嘛ら
座上ふあり諸士掾側ニ居並び見物を眺ふして其勝
の志鞁を打帰せバ双方より柄の長さ二丈の竿稔を持
て立向ひしニ墨児葉らん先始めニ砂しめらまさ点慈
争狛ふ渉られバ今ぞ一捻ニ火草らんを突倒し人々の眼
を驚かし飛摩等を雪がんと突出を火草らんハ沈勇丈夫の

老練なれバ少しも臆せず立向ひ手の文秘術をつくして
戦ふなり双方劣らぬ剛の者なれバ勝敗いつか果べき
と片唾を呑て見物も火草らん術や勝りけん中つと
声かけて墨児葉らんを突倒せり墨児葉らんハ面目
を失ひ倦くんで怒ると雖ども詮方なく殊の外しく武礼
して立別れ故人とも元の席に帰れバ座中ハ合人て
火草らんが文学のみならず手業力量を賞嘆しけるる
噠嘧喇嘛ざらいも火草らんを賞しあひ墨児葉らんを
齢もなるゆゑ上墨児葉らんが遺恨を含まんことを慮ふし
双方へ酒肴を下されて勝負の時の都合なり勝たる連衆る

こゝろなく負らうとて恥ぢ憤ることなく争ひに宝恬を擾せ
精水莫の更りを返し後く忠勤を励むべしと上意ありしかバ
人なつき差へて水音を以て戴し時移ぬるく延引なし
より墨児葉らんも我宿に帰りしなりいくのしても無念やるこ
がらく火草らんを付切ふる久しとのへども火草らんを卒
ねざと雖どもサーしも由なきをらればは本望を達する折も無り
しに今度喀嘯喀王ろうらも旨を挙げて唵嚩喇嘛ざらんら
つも返文をれ一味合体を打ち来りしかバ喇嘛ら門流の
輩下炭に至るを拾くぞ召集めありふ火草らん墨児葉らん
もを席に連りなる此時唵嚩喇嘛ざらんら席上にありて諸宗

向ひ今大清政を乱り国々の下民飢餓を免がれざるの苦患
を忍ぶ不忍びぞ徒く喀嘯喀王ろうらん旨を挙て大清を討
下民を救ふんと欲その激文をれ一味合体を歎きとこ
より喀嘯喀王ろうらんに加勢して可なりんる又是を討て
大清不忠を正して可なりん中く忽ちれバ烏斯坦うそさん出で
て中ゐるハ喀嘯喀王ろうらんより中栽なく立り大清虐政
日々に増長なきまで天何ぞ是を免さん既に滅亡の時至り
しなるべし抑らハ喀嘯喀王ろうらんと並び立て下民をすくひ
ありハ天に順ふの道なりんと相述まハ唵嚩喇嘛ざらんらまを
始め宗旨宗不一変して一味同意の連判を差入る此日の夭

狎邪ふて正当衣ふ入りきハ此時墨児蕨めろん不忠不義の心
を生じ今宵の虚ふ乗し火草さんを討て日比の鬱憤を
散ぜんと備人よりかしこまて亟卒し鉢氷瀚海のる備なる
枢戟の籬を破り密め窺ひ待るれ折るゝぬ身の火草さんハ
僕ふ燎羅をおせつく此所を通り過るを思ひがけなき横合
より墨児蕨めろんハ日比の遺恨おもひ知れと声くと旅乃
長槍をひく後より脊骨を掛て突出たり火草さん元来
健者なるまで寄あざらず声をかけてヤア未練なる抱の墨児蕨
めろんどの巳ま匹夫の勇を誇り我ふ敵しめろくをさ恨を打ものへ
欺し討とは奇怪なるまよしや浮痍ハ負されども正懸く

打の遂ふ討まんおと突まし槍をえ操寄る墨児蕨めろんハ
力の限り槍を携り押倒さんと挑めども元来武術力量勝
まし火草さんが死懐の猛威ふ由り遂く牙思ひさん槍を
捨て十く滅も刺ぞ後を晴まし何国ともなく逃失ける

韃靼勝敗記巻之四終